築地の朝は熱い

築地朝塾［ニュース］

2016年4月12日 春塾スタート

築地朝塾は、2015年9月に誕生しました。これからの日本を支える若い人たちに、「しっかりと頼む」という願いを込めて、スタートしたものです。

毎火曜日の午前7時10分から1時間、築地駅近くのアクア社ショールームで開かれます。講師は、各界で活躍する専門家。朝塾の趣旨に賛同して協力していただいています。今日的テーマを元に、詳細な解説をいただき、「で、君たちは何をすべきか」という塾生への問いかけで話が進みます。全11回の講座。祝日などの休会をはさむと3カ月にわたります。秋塾は9月1日に始まり、11月24日に終了しました。夏の終わりから冬への始まりという、季節の移ろいも、楽しみました。

春塾は、2016年4月12日にスタートします。

皆の力で発足

この塾を開くにあたっては、たくさんの方々に応援をいただきました。よく自分に言っているのですが、ひょんなことから自分の胸のなかの油紙に火がついてしまった、というふうなことを。そういう突飛もない現象が、自分に変革をもたらしてしまって、それが5月13日の夜だったのです。わずか3カ月で、やったこともないような挑戦を自分たちでやってみました。

一般社団法人はどうやって作ったらいいのだろうか、完全非営利というのは税務上どうしたらいいのだろうか、事務所はどこに置いたらいいのだろうか、講師はどんな面子が来るのだろうか。かなり忙しい著名な方ばかりなので、これを3カ月の中で全部はめるにはどうしたらいいのだろうか。そんな中で私も急に入院することになり、2週間女子医大に入院していたのですが、入院している最中に講師の方々に連絡をとって9月1日の開講にこぎつけました。

おそらく皆さんもどんな感じでこの築地朝塾が開かれるのだろうと、手探りの状態で参加されたと思うのですが、安保法案についても個々の姿勢については、こういう専門家の意見を聞いたうえでご判断をお願いするということで、どちらかに資するとか、与するとか、誘導するようなことはこの塾ではせず、広くいろんな専門家の意見をこれからも集めて間近でナマで聴いていってほしい。それで刺激を受けて自分たちの世代の次の世代にも、自分たちが貢献できるような、そういう芽を、心の形を、この塾を通して作っていって欲しいというふうに思います。

この中でコミュニケーションを図っていっていただいて、第一期生が10年先、15年先、20年先も団結をして、日本の国の片隅でもいいから、たくましい生き方を次の世代に伝えていってくれれば、望外の幸せだと思います。

朝塾は挑戦

私にとっても挑戦ですし、皆さんにも挑戦して欲しいし、自分を磨いていって欲しい。自分を磨くことは周囲も磨いてということになるし、コミュニティも会社も社会も国もというふうに、あまり自分を小さく座布団の上に座らせないで、広く考えて活躍をしていくという上昇志向をもっていって欲しいなと思います。

9月1日に開講した後に、私は松本行きの電車に乗りました。小澤征爾さんの80歳のバースディコンサートを聴きにいったんです。彼は1935年9月1日生まれで、その日に80歳を迎えるというコンサートでした。コンサートもすばらしかったのですが、その後に関係者だけのパーティがあって、そこで小澤さんがこういうことを言ったのです。

「音楽というのは不思議なものです」と。「私は人に巡り合って、バーンスタインとか、カラヤンとかに会って、それで非常にラッキーな人生を歩んでまいりました。きわめて不思議なことは音楽を極めたかな、天井に届いたかなと思った瞬間に、また元に戻ってしまう。何回上ったかなと思っても、さらに天井は高かった」というふうにおっしゃっていました。

恵まれた出会い

私も小澤さんの話を聞きながら思ったのは、自分も運に恵まれていたし、人との巡り合いにすごく恵まれたというふうに思います。小澤さんがカラヤンだったら、私はたぶん田中角栄とか、竹下登とかで、そういう人と間近に酒をくみかわしたり、食事をしたり、ゴルフをやったりいろんなことをやってきました。その人たちから受けた無形のソフトというか、そういうものがいつの間にか血肉になってきたと思うのです。それは書いたものじゃないのですね。書いたものじゃないのだけど、会ってナマの声を聞いて、それですごい風圧を受けながらも、その人たちのコミュニケーションを大事に大事に紡いできた。

子どものうちはたぶん自分の持っている時間を全部自分で使っていいのです。だけど大人の条件というのはおそらく自分の時間を人のために使う、あるいは別の組織のために使うというふうな余裕をもつことが最大、最低の条件だと思うのです。いつまでたっても与えられた時間と与えられたお金を自分のためだけに使うということでは、成長した大人とは認められないのではないかと思うのです。成長した大人の自覚をこれからの自分に課して、デューティとして課していくことが一人の成長になる、一人の成長は国の成長になるというふうに思うのです。

9月4日「夜塾」講演から

日本を支える若者への期待を込め、塾生募集

築地朝塾 春塾募集概要	
募集塾生	40名
参加資格	20代～40代の意欲ある学生～社会人
受講料	33,000円
会　場	アクア社ショールーム

2016春塾予定 ● 開催日	
4月	12日、19日、26日
5月	10日、17日、24日、31日
6月	7日、14日、21日、28日

曜日・時間は秋塾と同じ、毎火曜日、午前7時10分からです。

築地朝塾 規約	
1.	築地朝塾の会場は6時50分にオープンします。遅刻した場合、入室をお断りする場合がありますので、ご注意ください。
2.	会場内では飲食ができません。朝食の持ち込みはご遠慮ください。
3.	限られた時間ですので、進行については司会者にご協力ください。
4.	講座内容の公表はお断りします。
5.	当日のご連絡は、asa-info@tsukiji-asajuku.jp 宛てのメールで受けます。必要があれば折り返し、ご登録いただいている携帯電話に連絡します。
6.	欠席される場合は、事前に必ずご連絡をお願いします。 FAX: 03-3264-0880 Email：asa-info@tsukiji-asajuku.jp

塾舎

「株式会社 アクア」ショールーム
〒104-0045 中央区築地2-11-26 築地MKビル1階

● 講師（予定）

- 野田 聖子（衆議院議員）
- 野副 正行（元ソニーエンターテインメント社長）
- 関口　宏（TBS「サンデーモーニング」司会者）
- 諸田 玲子（歴史小説家）
- 音　好宏（上智大学文学部新聞学科教授）、
- 荻野 慎二（NECの「はやぶさ1」の開発者）
- 御厨　貴（政治学者・東京大学名誉教授）
- 坂本 光司（経営学者・法政大学大学院教授＝「日本でいちばん大切にしたい会社」著者）
- 金子 秀敏（毎日新聞 中国担当編集委員）交渉中
- 早野　透（元朝日新聞編集委員「田中角栄＝中公新書」著者）
- 筒井　修（和僑＝華僑に対する日本人海外経営者組織 元会長）
- 渡辺 捷昭（元トヨタ自動車社長）

2015年9月1日朝塾 開塾記念講演
岡本 行夫 氏（外交評論家）

「みなさんが世界に羽ばたくために」

国際社会を切り結ぶ

きょうは日本がどういう状況に置かれているか、個人々と国際社会をどうやって「切り結んでいくか」という話をさせていただきたい。

いま世界はものすごい勢いで構造変化が起きている。その最たるものが「人口」。人類の歴史で世界の人口が10億人になるのに約7000年かかったが、そこからの人口の伸びはものすごい。次に10億人増となったのは1930年で130年かかったが、その後は30年、15年、12年と10億人に達する期間が急速に短くなっている。

最大要因は人口

人口の伸びは、病気、疾病、貧困など負の側面でみられがちだが、現代はプラスの面が評価されている。経済の潜在成長力は、人口の伸びと生産性の伸びを合わせたものだが、その中で生産性の伸びは各国で平準化しつつある。

「グローバル・ラーニング」はそれを推し進めている一例。初めてOCW（オープン・クラス・ウィーク）制度を導入したのが米国のマサチューセッツ工科大学（MIT）。学内で行われている全ての授業（2000講座ぐらいある）のビデオをネット公開しているが、そのほか主要大学も相次ぎ授業のネット公開を始めた。世界トップレベルの学者たちの授業を、世界の若者たちが無料で視聴できる。知識の平準化、生産性の平準化が進んでいる。残念だが日本ではOCWを利用している学生はほとんどいない。こうした知識、生産性の平準化は、経済成長力の主要因の一つ「生産性」はもはやみな同じになったということ。残る一つ、人口の伸びが国力、経済力を規定する最大の要因になっている。

スピード感の格差

2050年の人口予測は、現在11億人のインドが16億人。中国は14・5億人。米国は4億2000万人で、日本は9300万人。日本対米国の人口比率はかつての1対2から1対4・5に開く。一人元気なのが米国。この国と付き合わない手はない。一番大事な国だと思う。人口のすさまじい伸びとIT爆発の相乗作用で、とんでもないスピードで変化し始めている。日本が一番遅れているのがこの「スピード感」。

米国のシリコンバレーで言われたのが「日本人は時間がかかりすぎる」ということ。向こうは1日単位、数時間単位で動いている。日本は月単位。すさまじいスピード感の落差を感じた。シリコンバレーに日本人の姿はほとんどない。企業の駐在員はいるが、自分の力で飛び込んで、切り結んでやろうという日本人がいかに少ないか。圧倒的に多いのが、インド、中国、韓国。それにヨーロッパ、南米からも集まっている。MITの留学生も同様。個人の力で留学している学部生の日本人はわずか3人。

取り残される日本

日本は住み心地がよすぎる。とってもいい国。安全できれい、食べ物がいい、こんな住み心地よい同質社会は世界中にない。小さなユートピアともいえるが、世界はすさまじい勢いで変わっている。我々はどんどん取り残されている。『フォーブス』の「アジアの有力企業50社ランキング」では、2006年には日本企業は20社近く入っていたが14年は1社、13年はゼロ。我々が自己満足、自己陶酔にひたっているうちに、日本のパイが相対的に小さくなってきている。

安保法制に賛成の立場だが、それはいまの状況がいいのかということ。大変、居心地のいい社会で、責任はほかの国に任せて日本人を守ることすらほかの国にやらせている。我々はほとんど何もしない、これがいいことなのか。国際社会で日本の孤立を加速させるのか。国際社会に日本を開かせるべき。

国際人になるには

国際人になるためには「人にやさしくする、親切にする」、それが一番大事な資格だと思う。日本人はコミュニティの外、知らない人たちの間では開放的ではない。自分の狭い範囲にバリアを作ってその外へは出て行かない。言葉遣いなど形式的なことにはこだわるが、中身の本質考えないのが我々の悪いクセ。多様性を大切にしないと日本は大きくなれない。多様性というのはいろんなものを包摂していくということ。異なった意見の相克の中から新しいものをつくっていくことを学ばなければならない。世界の発展はそういうところから生まれている。

国際人の心得をもう一つ。構想力を持つ、課題設定能力をもつことが非常に大事。我々はものを「どう作るか」は得意だが、「何を作るか」というコンセプト作りが不得手。これは多様性の話とも共通するが、いろいろな意見を闘わせる中からいろいろなものが出てくる。異端の意見にも耳を傾けるべき。

「牛後につく」

最後に。「鶏口となるも牛後となるなかれ」という中国の諺があるが、わたしは「牛後につくも 鶏口となるなかれ」と言いたい。大きな群れの最後にいることの方が、お山の大将で小さな群れのトップになることより楽。大きなものの群れに身を置いていれば、少しでも前に進もうという気になる。自分の周りには優れた人たちがたくさんいる。そういう人たちに食らいついていく、やっていることを盗む。自分の一部にしていく。自分にとって無理だと思うような課題を自分に押しつけていく。シリコンバレーの連中はみんなそれをやっている。是非、「牛後につく」ということをみなさんも心がけてほしい。

2015年 秋塾 プログラム	
9月1日	岡本 行夫（外交評論家）元外交官 / 外交評論家 / 実業家 「みなさんが世界に羽ばたくために」
9月8日	藤井 裕久（元財務大臣）政治家　83歳 「わたしが安保法制に正面から反対する理由」
9月15日	丸島 俊介（日本弁護士連合会元事務総長） 「21世紀日本社会の課題と人材養成 ― 司法改革の視点と取り組みから」
9月22日	祝日・休
9月29日	北代 耿士（日本エア・リキード㈱取締役会長）元松下電器産業副社長 「あなたは世界で戦えますか」
10月6日	宮家 邦彦（キヤノングローバル戦略研究所 研究主幹）元外交官 「新民族主義の危険 ―マネーとパワーの地政学」
10月13日	堤　伸輔（新潮社 編集委員） 「難しい人との付き合いを避けるな」
10月20日	佐野 尚見（松下政経塾 塾長）　元松下電器産業副社長 「松下幸之助の経営理念と松下政経塾」
10月27日	安藤 優子（ニュースキャスター） 「人から話を聞きだす術」
11月3日	祝日・休
11月10日	小笠原 倫明（元総務省事務次官） 「情報通信の現状と課題」
11月17日	由紀 さおり（歌手） 「わたしの中でのイノベーション」
11月24日	森田 正光（気象予報士） 「地球温暖化による環境への重大な危機」

朝塾雑感

丸島 俊介 氏 講演

2015年9月15日 朝塾
丸島 俊介 氏講演

9月15日、東京・築地は秋の気配を感じる爽やかな朝でした。一部、通勤電車の不通により出席できない塾生もいましたが、ほぼ全員が出席し、丸島俊介弁護士（日弁連事務総長付け特別嘱託）の講話をお聞きしました。企業間の国際的な紛争の解決など弁護士の役割が広がっていること、一方で「弱い人を救う」という使命が弁護士の本分など法務の世界の一端を多彩な事例を上げながらお話いただきました。「日本は和の国。紛争がなじまない」という見方もあるが、「和の後ろには泣いている人がいて、助けを求めている」と指摘されました。

2015年9月29日 朝塾
北代 耿士 氏講演

東京の昨夜のスーパームーンはとても綺麗でした。通常の満月を5円玉とするとスーパームーンは500円玉にあたるとか。その分大きなエネルギーを受けました。その力を早朝の朝塾で発散しました。

北代さんの講話は、自分を見極めることの大切さを述べたうえで、豊富な資料を交えながら世界に通用する人材となれ、付き合いを広げ自分を磨こう、企業の危機管理への対応など広くお話をいただきました。

2015年10月6日 朝塾
宮家 邦彦 氏講演

秋の風情が漂い始めた築地。第5回目となる朝塾は ひんやりした外気とは違い、宮家さんの「新民族主義の危険」と題した熱い話を聞くことが出来ました。講話は、地理的な条件を前提に見た国際政治の解説、冷戦終結と新パワーバランスの状況などを分かりやすく概説

宮家 邦彦 氏 講演

した上で、これからの日本の対外政治には同じ島国の大英帝国の戦略が参考になる。大陸に巨大な覇権国家が生じないように介入すること、そして大陸と健全な距離を置くことだーと述べました。さらに、利益を同じくする海洋国家と協力していく、特にオーストラリアやインドネシアなどの海洋国家との協力を深めていかないといけないと提言、めまぐるしく変わる国際情勢を「新民族主義の危険」という見方で解説されました。同内容は、近著「日本の敵 よみがえる民族主義に備えよ」（文春文庫）に書かれています。

2015年10月13日 朝塾
堤 伸輔 氏講演

築地は、澄み切った秋空が広がっていました。少し寒さも感じます。残暑の夏から始まった朝塾も6回目。今日もほとんど欠席もなく、皆さん、早朝より集いました。

ゲストは新潮社の堤伸輔編集委員。BS-TBSの報道コメンテーターも務めています。「難しい人との付き合いを避けるな」がテーマです。松本清張、塩野七生、イチローなどとの仕事を通して、得た彼らの素顔を紹介するとともに、その人のプロとしての厳しい仕事ぶりを紹介、それに立ち向かう編集者、さらにひとりの社会人として心構えなどを語りました。

そして塾生との交流を出来るだけ深めたいと、積極的に語りかける朝塾でした。

2015年10月20日 朝塾
佐野 尚見 氏講演

後半の朝塾へ。今日の講師、佐野さんは早朝からの講演に前夜から都心のホテルに宿泊されたとのことです。パワーポイントを使いながら、「松下幸之助に学ぶ……松下政経塾の教育」と題して、お話をいただきました。

佐野 尚見 氏 講演

佐野さんは、松下電器入りしたあと、会長の幸之助に呼ばれ、PHP研究所で月刊誌PHPの販売を命じられました。「100万部を売り上げ、しかも前払いで読者を集めるように」と命じられ、奮闘が始まります。

そんな経験を踏まえながら、企業、経営者にとって「企業理念」「国是」がとりわけ大切で、「産学報国」の言葉にその集大成があるということです。幸之助の歩みとともに、改めてその偉大な人柄を知ることができました。

そして、松下幸之助の私財70億円を投じて設立された「松下政経塾」の概要が紹介されました。

2015年10月27日 朝塾
安藤 優子 氏講演

真っ暗なかを朝塾に向かう季節となりました。本日の講師はジャーナリストの安藤優子さん。朝塾初めての女性の講師です。華やかな雰囲気に包まれました。

学生時代のアルバイトから始まったテレビとの縁、うなづくだけのアシスタントの悲哀、そしてジャーナリスト魂に目覚めた金丸信自民党幹事長取材など、女性テレビキャスターのはしりとしての体験をエピソードを交えながら、紹介されました。

クリントン大統領とのインタビューでは、何度も暗記した質問が、取材が始まった瞬間に吹っ飛び、真っ白な頭で臨んだそうです。しかし、その素直な気持ちでのインタビューがかえって、成果をあげ、自身の仕事の幅を広げたといいます。

取材の基本は「相手の話を良く聞くこと」。手を抜くと「相手は取材者の力不足を見抜き、結果、いいインタビュー、取材とはならない」と力を込めて話します。

安藤さんはこれまで振り返り「自分の意見を常に持ち、批判されてもくじけずに頑張ってきた」と語り、その頑張りが原点とのこと、激しい仕事の裏で、努力する大切さも伝わってきました。

2015年11月10日 朝塾
小笠原 倫明 氏講演

小雨の築地です。

ゲストは、総務省の前次官の小笠原さん。2年前に退職され、現在は損保ジャパンの顧問です。

標題は情報通信の現状と課題。役人的テーマで、すみませんということでしたが、旧郵政時代から情報通信にかかわり、現在の情報通信社会の支えてきただけに、経験を交えた豊富な話です。

日本の現状を、この30年間GDPは500兆円と停滞したまま、中国にも追いつかれ、今度、さらに離されるだろう、日本が経済大国でない時代になったことを踏まえたうえで、人口減、高齢化に対して、どう進むべきかを情報通信の可能性に託しながら、紹介されました。

特に、近年、多様な情報があふれており、このビッグデータをいかにビジネス、社会に生かすかが大切、ハードよりもソフトウエアの成否にかかっている。パソコン並みの機能を持つスマホはその基盤として役立つだろう。2020年の東京オリンピックを契機に新しい日本の姿を描くべきで、情報通信産業はその可能性を担っている。

などと述べました。

2015年11月17日 朝塾
由紀 さおり 氏講演

多くの塾生が感銘を受けたという由紀さんの講和。幼いころから歌い続け、

安藤 優子 氏 講演

歌と言葉を大切することを訴えながら、「テレビが何かを伝える力が、すごくいま弱まっている。言葉を伝える力が弱まっていると私は危惧している。46年間歌ってきた道のりの中で、私が一番大事にしていることの一つは、必ずアンコールをもらうということ。それは舞台上ではなくて。「また来てください」は社交辞令ではなくて。その次の年は難しいが、「もう一回やってほしい」といわれたら、それがきちっと実現するような仕事の仕方をして帰ってこないと。そうしないと私の仕事は続かない。「また来てくださいね」と言わせて、それが本当に実現していくことを目指している　などと、魅力あるお話されました。

由紀 さおり 氏 講演

2015年11月24日 朝塾
森田 正光 氏講演

テレビでおなじみの親しい語り口。そしてＴＢＳ子供電話相談室での、「天国と宇宙はどちらが近いの？」という質問に永六輔さんが、「宇宙です。天国は帰って来れないから」と回答された思い出を交えながら、温暖化に伴う地球変動の様子を大きなスケールで話されました。

森田 正光 氏 講演

夜 塾

朝塾では、塾生の相互の交流などを図るために、開講時と終了時に『夜塾』を開きました。お酒と食事を楽しみながら、塾への思い、なぜ参加したかのかなど、各自のお話を聞き、塾長や運営メンバーと親しく懇談、さらに英気を養いました。

秋塾終了時の夜塾では「これからも塾生同士のコミュニケーションを続けよう」と提案があり、有志によるネットワークもスタートしました。

築地朝塾への思い

ネット時代と広辞苑

すっかり存在感が無くなったのは「広辞苑」ではないだろうか。それが一家に一冊あった時代を若者は知らない。分からぬことは先輩に聞くのではなくネットで検索すればとりあえずは足りてしまう。

あっさりと……今はそういう時代だ。どなたにどう聞いたら良いのやら……そんな面倒なことを考える必要もない。一人で完結できると思ってしまう。人に分からぬことを聞くには、いきなりは聞けない。日頃から人間関係というか、信頼関係を築いてゆかねばならない。お互い同じ時代を生きているという気持ちを共有している方が聞きやすい。人との付き合いは容易ではないが、一人で生きて行くことが100％無理と思わぬ層がぶ厚くなってきている。人間関係よりネット関係が楽だと……。10数年前の後輩のつぶやきが今も耳に残る。「私の会社には尊敬できる先輩がいないんです」それを今年もまた30代前半の若者から聞いた。心を冷たい風が吹き抜けた。

失われた20年は何を変えたか

「失われた20年」とメディアは世相を切る。その20年の間に、社会は一変してしまった。デジタル技術は家庭にも学校にも職場にも大変な変革をもたらしていた。人間の思考・行動様式もいつのまにかデジタル技術のなかに吸い込まれるように変わってきている。「親父の背中」とか「先輩の背中」とか……「恥を忍んで」とか「聞くは一時の恥」とかは死語になった。虚実を含め、とてつもない量の情報が飛び交う時代になった。確かに便利になった気もするが、情報量が多すぎて逆に、自分が知りたい情報だけ知れば後は〝他人事〟。それで済む時代へと質的変化が加速する。

本来、情報とは双方向の現場から生まれるものだが、「Enter」をポンと押せば良い一方通行の時代になってきて、まどろっこしい「先達の話を聞く〝術〟」などは、表舞台から退場した。人は便利さを楽しんでいると、大事なものを失ってゆく。デジタル経由の情報は発信者の体温もオーラも伝えない。短い断定調の情報は背景を隠してしまい誠に怪しいが、検索側は長々した情報を敬遠して、さらりと、とりあえずの情報で満足する。そして底流ではブログ社会が情報への不信感を増幅させている。本物が見えぬ時代へ突入してきた。

朝塾誕生の背景

「築地朝塾」はこうした時代背景のなかで生まれた。この国の明日が抱える不確かさをこのままにしてはいけない。私個人は多くの先輩の背中を見ながら生きてきた。また直接指導を受けたからこそ昭和・平成を生き抜いてこられた。心底そう思っている。　正直逆もあった。「あなたに何も教わらなかったから多くを学べた」という裏面もある。世紀が変わる頃「俺たちは逃げ切ったが、お前らは大変だな～」と、切り捨てるように言われたことは忘れられない。逃げ切って食い尽くして去る気はないと、あれ以来ずっと〝切り返す策〟を考えてきた。

そして、「次の世代」と正面から向き合える場をなんとか提供してゆけないかと思い続けてきた。それは「次の世代」の前を生きてきた我々世代の果たすべき責任だと思ってきた。　生きることは現実で、仮想社会ではない。そこに魔法はない。まず「生」がありきで、「ネット」はそれを補完すれば良い。規模はまず小さい方がより良い。「小さく生んで大きく育てる」と先人は言っていた。

志を生かす

志はあるが飛躍のキッカケが掴めない若者に、志をもって昭和・平成を生き抜いてきた先達を引き会わせたい。極めた人たちの「生の声と姿」に引き会わせたい。真近で……本物の迫力を感じてもらって志に火をつけたい。

しっかり頼むとの願い

「築地朝塾」はこの国の明日を担う若者たちに〝しっかり頼む〟という願いを込めている。講師にお願いするのは、それぞれの分野で極められた方々ばかりを想定している。お一人お一人に「築地朝塾」の設立趣旨を説明し、賛同をいただいた方々が準備をされて、早朝から築地に来られます。講演に来てくださる方々も、運営に携わる人たちにも「築地朝塾」は真剣な場になっている。時代への危機感と、それに倍する「次の世代」への期待感を込めて「築地朝塾」は開講されたことを記したい。

2015/12/01

平本 和生

BS-TBS取締役会長

1969年 早稲田大学 政治経済学部卒業、東京放送に入社。テレビ本部報道局テレビニュース部、政治部を経て、84年に外信部 ワシントン特派員。88年10月～90年3月まで「JNNニュースコープ」のメインキャスターを務める。その後、政治部長、報道局長、TBSビジョン社長、TBS常務・専務を歴任。2009年から14年6月までTBSホールディングス取締役兼BS-TBS社長を務めた。

現在は、BS-TBS取締役会長。

火傷しそうな熱い朝

地球は小さくなりました。
宇宙ステーションはわずか92分で地球を回りますが、
あなたは、
一日24時間メリハリある使い方をしていますか？
あなたは、
「人生これで良いのか」と葛藤していませんか？
「心をもっと耕せないか」と悩んでいませんか？
「もっと"挑戦"してみたいが」と空回りしていませんか？
"挑戦"してみましょう。
ちょっとしたキッカケで、
全く新しい道しるべが、あなたの前に出現します。
組織から離れて、
ちょっと早起きして、
仕事に就く前の時間を生かしてみましょう。
そこには火傷しそうな熱い朝があります。
朝一番の時間を一流の講師と分かちあい、
一日をスタートさせましょう。
自分を磨くのは自分です。

築地朝塾 塾長　平本 和生（BS-TBS取締役会長）